



# 実弾を探せ



カワズ

初めて将来の夢を決めたのは幼稚園の時だった。

「私は幼稚園の先生になろう」、そう決めたのはなぜだったか。今はすっかり忘れてしまったが、たしか誕生日会の時に先生から「将来の夢は？」と聞かれ、先生を喜ばすために吐いた嘘だった気がする。「私は、先生みたいな幼稚園の先生になりたいです！」そう言えば喜んでもらえると思っていた。子どもゆえに無邪気だと思うが浅はかだと思う。おまけに言う则可愛くない子どもだと思う。けれど私には昔からそういうところがあった。

それから、特に夢のない私は小学校の6年間その夢を持ち続けた。幼稚園の先生になりたい、幼稚園の先生になりたい。呪いのようなその言葉は見事に私を守ってくれたが、中学生になってそれが壊れた。国語の授業の時だったろうか、最初の授業で先生が言った。

「いま配ったプリントに皆さんの夢を書いてください。でも安易な夢はだめですよ。女の子なんか多いのが幼稚園の先生とかかな」先生にはなんの悪意も無かっただろうが、それでも当時の私には衝撃が走った。腹が立ち、この先生は何様だとさえ考えた。プライドばかり高い私は負けじとそのプリントに「幼稚園の先生になりたい。これは幼稚園の時から夢です」と書きなぐったが、今思えばよくもまあそんなスッカラカンの夢を自信ありげに書いたものだと呆れてしまう。まあ夢があっただけ幾分マシなのだろう。もっとひどくなったのはそれからだ。中学二年生の時、まあ所謂“中二病”というやつにかかったのだろう。私の夢は「社会人」へと変化した。あまりに大雑把だ。

同じ学年の子にはまだ「アイドルと結婚！」などと可愛いことを言っている子たちも居たりして、まあそれと同じくらい現実味の帯びた夢を書く子も多かったのだけれど、私はそのどちらにも加わることは出来なかった。だって「社会人」だ。夢もないし具体性もない。これといって面白味に欠けることを書いてしまった...と思う。

そして中三の頃だろうか。職場体験なるものが有った。職業体験センターに言って職を学ぼうということで、私は祖母が介護施設にお世話になっていることから介護の仕事を選択した。教えてもらった内容はあまり覚えていないが、達成感があったことは覚えている。

そして高校進学へ...と行きたいところだが、私は進路希望の欄に「就職」と書いた。正直勉強が嫌いすぎて、これ以上勉強なんてしてたまるか。力仕事でもなんでもやってやると思っての行動だったと思う。しかしこれで親と揉めに揉め、「そんなこと言っていたらお前はいつか浮浪者になる」とまで言われ、結局高校進学を決めたわけだ。それでも働くことへの欲が強かった私は、就職に有利になるであろうと踏み商業高校へ進学した。とりあえず資格をたくさん取ってやろうという考えだった。

高校では確かに資格を幾つか取ることが出来た。勉強は苦手だったので英語検定やら簿記検定やらには受からなかったが、情報処理検定やワープロ検定、電卓珠算検定などには合格。高校在学中もレジのバイト(しかもガッツリ週5回)を1年ほど経験したり、図書委員として図書室に居座ったりと色々した。今思えば割と充実した高校時代だったのではないかと思う。そしてここで「就職」という壁にぶち当たることになるわけだ。有利になると思っていた資格は対して有利にな

りはしなかった。最初に受けた工場を見事に落ちてしまったのである。

正直なはなし「もう終わり」だと思ったしたくさん泣いた。なんせプライドが高いので、こういった類の挫折に弱いのである。人からボーンと強いことを言われたらすぐダメだ。しかしそうも言っていられない。就職先を決めないまま卒業なんてありえない。私は履歴書を書き、送った。介護施設への就職を希望したのである。

事はトントン拍子に進み、面接と小さなテストにも合格した私はそこで働けることが決まった。祖母は大変喜び、私もそれが嬉しかった。なにぶん昔からおばあちゃんっ子だったのである。よく祖母を連れまわして散歩に出たり、祖母から砂糖飴をもらったりした。そういった思い出も含め、私にこの仕事は天職だろうと確信した。働く前からだ。幼稚園のころ先生の為に夢を決めたみたいに、今度は祖母のために就職を決めた。これが正解だろうと思った。

けれど、働き始めてからはそうはいかない。たくさんの壁にぶつかった。ぶつかりまくりだ。上司を意地悪だと思ったし、認知に入った御利用者様と触れ合うことも悲しかった。何が悲しいって、毎日が初めましての繰り返し...というのがもうツライ。顔も名前も覚えてもらえない。どれだけ頑張っても忘れられてしまう。悲しくなった。

しかしある日私は気付いた。毎日が初めましてということは、前日の失敗も忘れてもらえるということだ。「声が小さい」と怒られたこと。お茶を溢してしまったこと。オシメ交換に時間がかかってしまったこと。そうしたこともリセット出来る。毎日新しい自分で挑戦できる。そう思うと元気が出た。明日は大丈夫だと思えた。すると仕事が段々楽しくなって、御利用者様と触れ合うことに喜びも生まれた。一年、二年と働いていくうちに顔を覚えてもらえるようになった。誰かの役に立っている、という実感に胸が震えた。

しかし、だ。大好きだった御利用者様が癌であることが発覚した。家族様は病院に行くことは希望されず、「亡くなる時はここで」と言った。どれだけ熱が出て、癌の箇所が大きく腫れても、その方は病院には行かなかった。「痛い」とも言わなかった。その方は発語の出来ない方だったのだ。時々、スタッフの真似をして挨拶をしたり、歌を唄ってくれたりはした...けれど、癌が発覚してからはそんな事も無くなった。それでも、私はその方のことが大好きだった。その方の為に、今までずっと頑張ってきたのだと言っても過言ではない。その方が居たから続けられたのだ。

落ち込んだ時、怒られた時、嬉しかった時。私はよくその方に話しかけていた。発語出来ない方なので返事は無かったが、ただ寄り添ってくれることが嬉しかった。ご老人の支援をするのが介護の仕事だが、私はご老人に救われていたのだ。今でもやっぱり、天職なのだと思う。そして11月の初旬、その方は施設で息を引き取った。つめたあくなかった手が、ただひたすらに悲しかった。「朝ご飯、残してありますよ」、私の言葉にその方は何も反応してくれない。亡くなったことを実感した。

それからもうすぐ5ヶ月が経つ。そして私はもうすぐこの仕事を辞める。天職だと思っていた仕事からサヨナラするのだ。原因はなんだ、と聞かれたら一番にその方の死のことが浮かんでくるがそれだけではない。初めての職場で色んな事があった。セクハラもあったしイジメもあったし、仕事をする上で意見が食い違うことも山ほどあった。一つの悩みだけなら乗り越えられるが、

一気にこられるともうダメだ。どうにも疲れてしまったらしい。

こんなことを言うと決まって大人たちから「何処に行っても同じだよ」と返される。つまりこの離職を逃避だと言いたいのだろう。そうだ、私は逃げるのだ。そんなことは分かっている。

仕事を辞めてどこに行くのか、何をするのか。今はそれさえも決まっていない。桜庭一樹の小説「砂糖菓子の弾丸は打ち抜けない」風に言うなれば、今の私には実弾がないのだ。やりたいこと、将来の夢、はたまた希望？やはり実弾は見つからない。あるのはスッカスカの現実と砂糖菓子の弾丸だけだ。実弾はない。

だから私は再び探しに行かなければいけない。実弾と、それに見合った現実を。それがなくちゃ始まらない。始まらないから、私は春一番の風に押されて新しい一步を踏み出していく。今度は誰かの為でなく、自分の為に未来を決めよう。